海及び船室

一月初旬より二月初旬にかけ、九州の沿岸を一周せり、歌四十四首のうち。

闇のうちにあまた帆ぞ鳴る、帆ぞ動く、わが汽船の漸く動き出でむとする港に

船室の窓よりやはらかき朝日きたる、いでわがいとしき麥酒を呼ばむかな

身體(からだ)は皮膚のみのごとくつかれたり、船室の窓よりかなしき朝日きたる

すれすれに岬の絶壁を過ぐ、わが船室の時計のおと

風出でて浪ぞ立つ、朝日いまだ低くして陰翳(かげ)のみ多き海に

わが顔にまともにさせる濃き朝日、船は搖れに搖れ、濃き朝日

朝の甲板(でつき)にざあざあとして水そそぐ、濃き陽のなかの四五の萠黄服

乗換驛、待ちゐし汽車に乗りうつる窓にま白き冬の海かな　（小倉驛）

大海の荒れの岸邊の浪のかげに人群るる見ゆわが冬の汽車

風たてば有明の海は大いなる白き瀬となる、わが小蒸汽船よ

有明の海のにごりに鴨あまたうかべり、船は島原へ入る

冬雲のかげりに暗き島、岬、憂き島原へわが船は入る

船に乗り海を渡る、なんのたのしみぞ、船に乗り縁もなき海を渡る

うるはしく笑ふものかな、笑ふなかれ、わがさびしさに相觸るるなかれ

箱崎の濱のしら砂ふみさくみ海のなかみち見ればかなしも　（海の中道は岬の名なり）

冬山の國ざかひなるいただきを搖れまがりつつ行けるわが汽車

櫻島はけむりを噴かぬ島なりき、あはれ死にたる火の山にありき

海の黒さよ、ほそぼそとしてうかびたる佐多の岬の夕日の濃さよ

浪高み船のあゆみの遅さよな、みさきの端(はな)の白き燈臺

やよ窻に灯をともすなかれ、海はいま薔薇いろに暮る、やよわが黒船

やよ老人、いま船室には君とわれのみ我がさかづきをねがはくは受けよ

船は搖るれども歩むともなし、窻に黒く月夜の陸(くが)が見ゆれども動かず

日向美々津港附近にて

あはれ悲し、いで衣服をぬがばやと思ふ、海は青き魚のごとくうねり光れり

絕壁を這ひあがる、黒き猫とや見えむ、いまかなしき絕壁を這ひ上る

岩角よりのぞくかなしき海の隅にあはれ舟人(ふなびと)ちさき帆を上ぐ

悲しみに身もいらち、黒く巨いなる岩のかげに尿(いばり)をぞする、海青く動く

うれしうれし、海が曇る、これから漸く私のからだ
にもあぶらが出る

身體は一枚の眼となりぬ、青くかがやける海、ひら
たき太陽

岩のあひだを這ひて歩く、はだしで、笑ひて、浪とわ
れと

下駄をぬいでおいたところへ來た、これからまた
市街へ歸るのだ

この帆にも日光の明暗あり、かなしや、あをき海の
うへに

水平線が鋸の刄のごとく見ゆ、太陽の眞下の浪の
いたましさよ

わが窻の冷たさよ、海はけふ寶にいく度びか色彩
を變へけむ

少女よ、その蜜柑を摘むことなかれ、かなしき葉の
かげの

ひややかに海より廣き帆の來りぬ、港の旅館の窻
のまへに

光なき海、濃き藍色にたたえたり雨晴れむとして
一羽のしろき鳥

闇夜の波は戀するをんなの指のごとし、小ランプとわれとの窻のしたに

精力を浪費するなかれはぐくめよと涙しておもふ、夜の濤に濡れし窻邊に

かなしき月出づるなりけり、限りなく闇なれとねがふ海のうへの夜に

再び同じ所にて

とある雲のかたちに夏をおもひいでぬ、三月の海のさびしき紫紺

春の日の眞黒き岩にあふむけにまろがりて居れば睡眠さしきたる

太陽にあたためられしこの黒きおほいなる岩にいざやねむらむ

われ知らずうたひいだせるわが聲のさびしさよ、春日、紫紺いろの海

をちこちに岩のとがれる、陰翳おほき午後四時の紺の海となりにけり

岩かどに著物かきさき爪をやぶりきりぎしを攀づ、椿折るとて

高まりたかまりつひに碎けずにきえゆきし曇り日の沖の浪のかげかな

なみ高し雨後の春日をはらみたる綿雲のかげにみさご啼くなり

椿の花、椿のはな、わがこころもひと本の樹のごとくなれひとすぢとなれ

わびしき濱かな、貝がらのくず砂のくずいざやひろはむ、海も晴るるに

夜の雨しじにふるなり、沖津邊はかすかにひかりかすかに光る

よるの雨そこともわかぬ海岸にほのじろき泡のつづくなりけり

潮引きてあらはれし岩に鷗居り空みて啼けば降りくるがあり

おのづから盲目のごとく岩を踏む、海見れば湧くおもひさびしも

夕陽に透き浪のそこひに魚の見ゆ、あるまじきこと思ふべからず

默然と岩を見つめておもふこと、ひとに告ぐべききはならなくに

をんなの匂ひなりけり、ふと雲がわたれば海のあ
をくかげれる

たらたらと砂ぞくづるる、わが踏めば砂ぞくづる
る、ある色の海の低さよ

海もいま倦むらし、わが靈魂は曇らむとす、いづく
に動き行かむとするや小蟹よ

木の葉にも盛れるがごとく海は小さし、わが命燃
え燃えて一すぢの青き煙たつ

椿の木、椿の木わが憂愁にきらきらとひらたき海
のうつりかがやく

ふと浪にむかひてうすく笑ひけりあやふき岩を
降りはてしとき

海よかげれ水平線のくろみより雲よ出で來て海
わたれかし

鳥のおほさよちひさき波のたちさわぎ海あさあ
さとかげりきたりぬ

酔樵歌

われも木を伐る、ひろきふもとの雑木原春日つめたや、われも木を伐る

春の木立に小斧振ることのかなしさよ、前後不覚に伐りくづしけり

春の木は水氣ゆたかに鉈切れのよしといふなり春の木を伐る

峰高み海見をすれば春がすみをどめるをちに青く見ゆかに

あの山この山粘土細工のごとくにも見えきたるなり淋しみて居れば

人聲ぞとおもへば鳥にありにけり春日けぶれるみねの松山

見おろせばふもとに山の幾うねりうねりうねれるにみな松の生ひたる

なにはあれ第一の峰にのぼらむとかすめる山の背を歩み居り

深山わけ入り朽木の松のふしを掘るその松の節たいまつとなる

けむりありて山に野火燃ゆ、くもり日のひかれるそらを啼きゆく鳥

太陽のかげりてゆけば悲しみつ雲いでて照ればよろこびぬ峰のとがりに

■

わな見にとまだきに行けばおほいなる兎かかり居りわれを見て鳴く

霞に濡れて黒くつめたく山がせまる、窪地のしけみに雉子待つわれに

かすんだ山にをりをり風が來る、樹が鳴る、わが手の銃のつめたさよ

我がかなしみに火をつけるやうに、地團太踏みて鳥を逐ふなり

見知らぬ窪地の灌木原におりて來た見廻せば見まはせば春の鳥啼く

傷つきて鳥かかりたる喬木に攀ぢむとて走せ寄
れば青き樅の樹

■

テーブルの上いつぱいに枝はひろがり咲き群が
る躑躅、夜の青い瓶

ペンさきに滲み出るインキ、ふと顔をあぐれば顔
をつつめるつつじ

夜になれば健康の恢復して來るごときわが身體、
ランプのかげの躑躅

不眠症とざさぬ窓と戸外の闇と、ときどき机に
落つる赤い躑躅

不眠症のラムプのかげのわが夜明、瓦たたきて雨
ふりしきる

すずしげに顔の感覺はたらけり後のつかれを思
はずもがな

■

わけとてはなくぢだんだを踏んでよろこんでみ
た、喜んだとてなにになならうぞ

居るところを失くしたこころがうつとりとかなしい日光を見つめて居る

遠い麓に杉の木がまばらに立つて居る人の生にある悲哀のやうに

からくりめけるわれのこころのはたらきのはたと止まれり、雲雀うららうらら

この國に雪も降らねばわがこころ乾きにかわき春に入るなり

鶺鴒が雲雀の聲によく似るとこころに云ひてあふぐ春の日

曇日のかすみのなかに鳥啼き鶺鴒啼き渓にのぞみてこの窗の高さよな

じつと忍んで見て居れば、蟇が啼く、大きな咽喉をあけて春の日に啼く

オヤ、そこにも啼く、なかに椎の樹二三本、けらけららと蟇啼きかはす

蟇の眼のかなしさよ、つまが戀しとひたなきに啼くその蟇の眼

踏めばくづるる山の赤つち、乾いた土、どこにしのんで蟇の啼くぞえ

ほろほろとつちのくづれて蟇の啼く、きりぎしの春のつちのわれめに

なやましき匂ひなりけりわがさびしさの深きかげより鰭ふりて來る

をんなが濡れた繪具のごとくそばを通る、つめたいさびしい春の一日(いちにち)

我がうてるうさぎ雉子の肉つねに厨の釘に絶えざり、春暮れかかる

朝の圍爐裡猫もとりわけあまゆるをあやしてあれば啼けるうぐひす

けふも雨ふる、蛙よろこびしよぼしよぼに濡れて櫻も咲きいでにけり

春雨にみかさまさりて谷ぞこを石のながるるねざめてぞ聞く

春の日のぬくみかなしも、ひたすらに淺瀬にたちて鮎つり居れば

瀬の鮎子わが痩脛(やせはぎ)もきよらかに寒みいたみて春はゆくなり

いだ釣ると春の川瀬につどひたるふるさとびとら黑き衣著る

海いろにうちかけり居りかづら取るとてわがひとり入る尾鈴の山は

いとながきかづらにありけり青きかづら引けども引けども盡きむともせず

春の日や老いしかづらのあをあをと葉をつけて居り青かづら引く

いとながく青きかづらをわれの引く身うちのちからこめてわが引く

ぬすみする人のごとくにひそひそと深山にひとりかづら引くなり

夏の日の苦惱

我が赤兒（あかご）ひた泣きに泣く地もそらもしら雲となり光るくもり日

妻はしたにわれは二階にむきむきにちさき窓あけくもり日に居る

片手のばせばとなりの屋根にとどくなりわれの二階のまどのくもり日

啼きまよひ鳶こそ一羽そらにまへくもり日もわ
れも流れ流るる

一枚の亞鉛(とたん)のいたのうす板のきらめき光るわが
こころかな

油なすものうさつらさほてほてとからだほてれ
ど空を見てをり

うつうつと浮かずなげかずかなしまぬこのここ
ろ何にならむとすらむ

梅雨雲(つゆぐも)の空に渦まき光る日はこころ石とも冷え
てあれかし

あやふきはこころなりけりゆらゆらに甕(もたひ)にまた
く滿ちてうごかず

大いなる呼吸一つ吐かむねがひにて曇りにおも
き窻はひらけど

夏深しいよいよ瘦せてわが好むつらにしわれの
近づけよかし

雜草(ざつさう)に花咲くごとくいまのわが唇(くち)より聲のたえ
ず出づるも

わが顏は酒にくづれつ友がかほは神經質にくづ
れるにけり

踏みもせよなげうちもせよしかはあれ折れくづれむちから今はわれになし

おほいなるぱいぷ買ひたし大いなるぱいぷくはへて睡りてありたし

曇り日の光りの中に蚋（ぶよ）なきて汗ひややけきわが身をめぐる

朝まだき夏の市街のかたすみの酒場（バー）に酔ひをればぱ電車すぎゆく　（山蘭と飲む二首）

夜ふけし夏の銀座のしきいしのつめたきを踏みよろほひあゆむ

木綿（もめん）蚊帳（がや）わが兒ひしひし泣きいづるあかつきとはやなりにけるかな

いつしかに頭かたぶけ晝のまどとほき電車を聞いてゐにけり

兒をあやすとねぢをひねればほつかりと晝の電燈つきにけるかな

大木の群れて暗きをおもひいで植物園に行かむとぞ思ふ

植物園にゆかむと思ひ憂しと思ふ晝の電燈ともりたる部屋に

わが頸のみぢかきことを悲みぬおほいにわれをののしらむとし

指もてつまめば汗ぞしみらに光り居りはだえさびしや蟬啼きやまず

くもり日に啼きやまぬ蟬と我が心語らふ如くおとろへてをり

ししとに汗は湧けどもうちつけに暑しともなく萎え居るなり

ものうしやあまりに瓜をはみたれば身は瓜に似て汗ばみにけり

秋風の歌

秋風の歌

音に澄みて時計の針のうごくなり窗をつつめる
秋のみどり葉

夕かけて照りもいだせる秋の日にさそはれて家
を出でにけるかな

かの欅あはれならずや秋風にい群れて蟬の啼き
も入りたる

秋の葉の日に光るかなひそひそと急ぐははやも
散りしきりつつ

かなしきは日の光なり秋の樹にしとどに青葉散
りしきりつつ

秋の森に蝶こそ一羽まひ出でたれやがて青葉に
とまりてうごかず

玉に似てこころふとしも靜まりぬ路傍のおち葉
踏むに耐へむや

わがこころの底ひにものを見むとするさびしさ
のなかにけふもこもれり

食はむとてしばしおきたるうす青の林檎に蜂の
とまりゐにけり

くだものの皮を離れぬ秋の蜂ちさきをみつつ涙
ぐみける

朝ぐもりはれゆく空に風ぞ見ゆさびしさに酒を
わがのめるかな

いつしかに夏はすぎけりきりぎしの赤土原(あかつちはら)に蟻
の這ひをり

いつしかに夏はすぎけりただひとり野中の線路
われの横ぎる

脚ひとりちからをおぼえかぎりなく歩まむとする晩夏の野や

かにかくに靜かに眠れこころより滿ちたらひなば起きておもへよ

夜の雨なれがこころはいづくぞとわが身つつみて降りしきるなり

しみじみとあふけば夜の雨のつぶいづれか胸にしまざらめやは

ねがはくはひらたき板にふるごとくわれのこころに降るな夜の雨

眼ひらけば紙の障子があかあかと夕日に染みて風もきこゆる

夜の雨にぬれゆく秋の街並木ぬれつつわれも歩みてをりき

■

あはれ悲しこころダリアの花を折り倦める心をとりよそはばや

默然とダリアの花に見入りぬればこころしばらく晴れてゐにけり

園丁は黒き帽著つ一心にダリアの蟲に取り入りて居り

たけたかきダリアの園にほそほそと吹く秋風は雨の如しも

園丁の黒帽子よりなほ高くそびえて風に咲いてゐるなり

分秒と時間を惜むこころもち重きまぶたを瞑ぢむとはする

顔色のややに赤きは健康かこの倦みごこち何の故ぞも

苦(にが)き木の根をひねもす嚙みて居りぬべしこの蒸(むれ)心地(ここち)やるよしもなき

わが額の痩せおとろへに似もつかずつめたきあぶらにじみたるかな

秋の樹の濡れて窻をばつつめるにこころいらだち煙草をぞ吸ふ

紙の障子にせまきガラスのはめられつ冷き秋の庭園の見ゆ

雨まてる窻べに雨のふりて來(き)ぬ今は身を投げやすらかにあらむ

空のそこひに赤みを宿し夕雨のさと落ちてきぬ
わが細き窓に

日に白みとほき林を吹く風のさびしいかなや四
方をとざせり

骨と肉のすきをぬすみて浸みもいるこの秋の風
しじに吹くかな

いとどしく心あやふく傾きてやぶれむとするに
風凪ぎにけり

おほらかに風無き空に散りて居る木の葉ながめ
て窓とざすかな

夜の讀書は海に青魚のあそぶよりかなしいかな
や風の聞ゆる

いたづらに咽喉のあたりに呼吸をする生物の如
く寢ざめてありけり

わが居るは風のゆくゑにあるごとく呼吸を引き
つつきいてゐたりき

吸ふいきの吐く呼吸のすゑにあらはるるさびし
さなれば追ふよしもなし

生きたるもの死にたるもののけじめさへ見わか
ずなりて涙こほるる

きりきりと齒さへ痛めどこのこころとりなほしえでつかれはてにけり

とぢし窓いらだつこころけはしきに耐へつつ風を聞いてゐたりき

しみじみとおとぎ噺をかたり合ふ兒等ありき街(ま)路(ち)の夕やみのなかに

秋霧の茄子のはたけに人居りきやがて車を曳きて去りにけり

乏しきを拾ふが如くをりをりに鏡とりいでつらをながむる

古時計とまれる針の錆びはててむなしきかたをさしてゐるなり

齒も碎くるばかり一氣(いつき)に嚙みしめむよろこび事にいまだ會はなくに

ばらばらと夜の障子を打つ雨におびやかされて戸外(そと)に出でゆく

つめたきは風にありけりわがこころ白布(しらぬの)の如く吹かれたるかな

■

わがちさきまどに隣れる病院のガラス障子はいつも閉(しま)れり

白き帽子白き衣著しをとめ等の群れて笑へりガラス戸ごしに

いそぎ足廊下を通ふ看護婦をガラス戸ごしにながめてぞ居る

とりとめて病めりともなく楢の葉のまばらに染まるこころなるらむ

病院のことのみ思ひ居しがふとわが手のよごれに氣づき洗ひにと立つ

四邊(あたり)みなつめたき日なりわが心の疲勞(つかれ)衰弱(おとろへ)をのみ思ひてをれば

秋風の海及び燈臺

東京靈岸島より乘船、伊豆下田港へ渡る

ことことと機關のひびきつたひくる秋風の海の甲板の椅子かな

蛙なすちひさき汽船あき風の相模の海にうかびゐにけれ

伊豆の海や入江入江の浪のいろ濁り黄ばみて秋の風吹く

伊豆の岬に近づきしころ風雨烈しく船まさに覆らむとす。

ひたひたと濤はわが頰をなめて過ぐ船室の窓に怒るわが頰を

走りかね蛙の如く這ひゐつつ汽船くだくるも死ぬまじとする

雲さけて落日は海に漏れにけり赤きにうかび濤の立つ見ゆ

あはれ陸(くが)見ゆ白なみがくれ岩も見ゆ死ぬまじ汽船は裂くとも

屍(しかばね)に鳥よるごとくゆふぐれの伊豆の岬に白き浪寄る

ふと時計の振子とまりし如くにもこころ冷えきて暴風雨(しけ)を見るなり

ゑびす丸甲板(でき)ふみたたき、ゑびす丸つひに下田に入りにけらずや

下田港より燈臺用便船に乘りて神子元島に渡る、樹木なき岩礁なりき。

船は五挺櫓漕ぐにかひなの張りたれど濤黒くして進まざるなり

大濤の蔭を漕ぐとき手もぬれず船はいはほと動かざりけり

船子(かこ)よ船子よ疾風(はやち)のなかに帆を張ると死ぬる如くに叫(おら)ぶ船子等よ

大うねりかたむきにつつ落つるときわが舟も魚となめなりけり

次ぎのうねりはわれの帆よりもたかだかとそびえて黒くうねり寄るなり

鯨なすうねりの群の帆のかげに船子等は金屬と光りゐにけり

はたはたと濡帆はためき大つぶのしぶきとび來て向かむすべなし

やと叫ぶ船子等のこゑに驚けば海面くろみ風來るなり

とびとびに岩のあらはれ渦まける浪にわが帆はかたむき來る

やうやくに帆に馴れ浪に馴れにつつこころゆるめば海は悲しき

泡だてる岬をややに離れくれば沖は凪ぎゐて雲にかげれり

船子だちの若きはねむり老いたゐは風のはなしをわれに聞かする

笛の如わが小さき帆のなりはためき沖をはせつつ潜水夫を見たり

しばらくも揺れのやまざる沖にしてをんなの聲をきくは悲しき

遠ざかる潜水夫の舟をさびしみてわが帆をみればぬれてゐにけり

飛沫(しぶき)ちりわが帆のなかばぬれたるに雲を漏れつ
つ日の射しにけり

いろ赤くあらはれやがて浪に消ゆる沖邊の岩を
見てはしるなり

　その島にただ燈臺立てり、看守K―君は
　わが舊き友なり。

友が守る燈臺はあはれわだ中の蟹めく岩に白く
立ち居り

岩あかく崖もひとしほ濁血(にごりち)の赤かる島の友が燈
臺

おほいなる岩のいただき黒蟻と見えつつ友はも
のを振りをり

やと叫ぶ聲かもすがた目には見えいまだまつた
くきこえざるなり

友がよぶ赤き斷崖(きりぎし)見あげつつ舟をつけむと浪と
あらそふ

岩赤きその島にしも近づけば浪はいよいよ荒れ
て狂へり

赤岩の十丈(とたけ)にあまるきりぎしを這ひつつややに
友の下(お)り來る

むらだてる赤き岩岩飛びこえて走せ寄る友に先づ胸せまる

顔も蒼み人に餓ゑたる餓心地火の如き手をとり合ひにけり

別れゐしながき時間も見ゆるごとさびしく友の顔に見入りぬ

歩みかね我が下駄ぬげばいそいそと友は草履をわれにはかする

友よまづ吾の言葉のすくなきをとがむな心何かさびしきに

相逢ひて言葉すくなき友どちの二人ならびて登る断崖

石づくり角なる部屋にただひとつ窓あり友と妻とすまへる

その窓にわがたづさへし花を活け客をよろこぶ若きその妻

石室のちひさき窓にあまり濃く昼のあを空うつりたるかな

■

ただひとり淵にのぞめる心地しつ椅子に埋れて酒をまつなり

盲目にて目とぢて今宵ひとりにて飲みてあらむと椅子に埋るる

夕かけて風吹きいでぬ食卓の玻璃の冷酒のうへのダーリア

わが目いま魚の如くに細くなりつめたくなりて夜に入るなり

厭はしきにたへむとするはあだなりとささやく酒は月いろにして

金屬の匂ひしにつつ背の方の燈火いたく更けしづみけり

我がまなこちりのくもりも帶びぬ夜にもののうつるはあはれなるかな

テーブルの白布の上にはらはらと夜の白雪ちると思へり

ひとり去り二人去りつつ夜の部屋われのみひとり飲めるなりけり

みな去れ冷き部屋となして去れ夜の椅子にわれのひとり飲めるに

動かじな動けば心散るものを椅子よダリアよ動
かずもあれ

風わたる戸の面の庭木見やるさへいとはしくし
て酒を飲むなり

つめたきは湧きし血しほかひいやりと灯のかけ
に身ぶるひをする

さびしき周圍

わくら葉の青きが庭に散りてあり朝はひとみの
わびしいかなや

死せる鳥むれつつ空やわたるらむわが日はけふ
もさびしう明くる

思ふままにふるまひてさてなりゆきを見むと思
ふに心冷し

言葉とわれとはなれ離れにあるごとき冷き時に
いつ逢はるべき

われならぬ人居りてけふもわがごとくわびしき
ことをして居たりけり

とりとめて何も思はぬ時多し葉の散る如きわが
身なるらむ

ふかきよりうかびいでつつ心ややあらはになり
て悲しみてゐき

こよひまた眠られぬ身に凍みひびく冬の夜雨は
神のごとしも

夜の市街もわが身もしとど凍みとほり氷れとご
とく時雨ふるなり

時わかず心冴ゆればわれと身のおきどころなく
さびしかりけり

あはれこは醜くも市街をゆくものか思ひあまり
てせんすべもなく

電車よりとびおりするな死にやせむこのごろの
ごとうつつなければ

さびしさの凍れるかたへ妻も子も老いたる母も
動きゐるなり

わが如きさびしきものに仕へつつ炊ぎ水くみ笑むことを知らず

妻や子をかなしむ心われと身をかなしむこころ二つながら燃ゆ

照りくもり空のをちこちゆきちがふ冬雲(ふゆぐも)の群(むれ)を窻にいとへり

■

天(あま)つ日の匂ひしづかに身にもしみあはれしばしは眠れこころよ

吹きすぎし風のたえまにほつとりと日の匂ひこそ身によどみたれ

ことさらに鳥も啼くがに思はれて落葉木立を立ちいでにけり

■

たましひのけぶるといふはあまりにも淋しからずや戀となれかし

身に燃ゆるは新しき戀あるはまた埋れゐし夢かにかくにもゆ

こころさへ身さへ落葉のいろもなくさびはてて
いま燃ゆるこの戀

冬空のあまり乾けば市人もひそかに雪をまつに
あらずや

地を踏めど地にいらへなく心のみくくとひびき
て人の戀しき

雪どけの軒のしづくにいざなはれ友見まほしく
家を出にけり

片幹にこほれる雪のけぶりつつ入日の中に立て
り欅は

枯木立木木より雪の散りやまず行きずりの身に
西日赤しも

おのづから悲しき聲にいでてなく雪の日の鳥西
日にきこゆ

雪ふかき落葉の木の間入日さしあまりてここの
窻を染むるも

わがそばに火ありて水を煮るを得べし玻璃のう
つはに水も滿ちたり

火をたたじ沸湯（にえゆ）たたじとつとめつつさびしさに或夜起きてゐにけり

なすべきをなさざる故にこの如くさびしきものとなりしやわれは

春來（はるき）ぬとこころそぞろにときめくをかなしみて野にいでて來しかな

青草の岡にいでてあひこらへかね泣ける涙のあとのさびしさ

春の雲照りつつ四方をとざせる日高きに立てばわが世悲しも

鶯の啼きてゐにけり久しくも忘れゐし鳥なきてゐにけり

つかれはてすわれる岡のもとをすぎ春あさき日の小川流るる

おほぞらに垂れつつ春の雲光りここの林に鳥むれ騒ぐ

大正四年四月廿七日印刷
大正四年四月三十日發行

行人行歌
定價六十錢

不許複製

著者 若山牧水

發行者 東京市神田區佐久間町四ノ二三 植竹喜四郎

印刷者 東京市本所區番場町四番地 朝岡平藏

發行所 東京神田區佐久間町四丁目二十三番地 植竹書院
振替東京一二九五三・電話下谷三四一九

—印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場—

（福神製本）

現代和歌選集叢書

第一篇 夕暮名歌選集 **黑曜集**
菊半截・繻子製表紙
定價六十錢

第二篇 牧水名歌選集 **行人行歌**
繻子と絹の裝幀
定價六十錢

第三篇 哀果名歌選集 **萬物の世界**
菊半截箱入美本
定價六十錢

續刊
空穗選集　勇選集　白秋選集
信綱選集　柴舟選集　以下交涉中

278
228

終